

無型アクセント地域における アクセントの共通語化

—茨城県常陸大宮市の調査から—

小 林 愛

1. はじめに

アクセントとは、「個々の語について定まっている高低の配置である⁽¹⁾」という。また、アクセントにはアクセントが同音異義語で異なることを利用し意味の違いを表す“弁別機能”がある。しかし、調査を行った茨城県常陸大宮市は

①弁別機能がない

②語・文節ごとにアクセントが確定的ではない

という前述した要素に反する2つの特徴を持つ無型アクセント地域であることがわかっている。無型アクセント地域は、北関東から東北地方岩手県・宮城県の一部にかけて、他は九州・四国・福井県・静岡県の一部地域等が該当し、今回調査を行った茨城県常陸大宮市は茨城県の北西部に位置する。

「近年、日本各地の方言は共通語化が進行している」というのは多くの人が認めるところである。無型アクセント地域も例外ではなく、茨城県全域で共通語の習得が進んでいる（山田 2007）。そのため、無型アクセント地域である茨城県常陸大宮市を調査することで、無型アクセント地域の特徴がどう変化していくのかその過程を論じるのが本稿の目的である。

目的のため、今回は発話（＝産出）にどのようなアクセントが使われているのかはもちろん、アクセントをどう聴取するか（＝知覚）の調査も行った。産出と知覚の両方から、無型アクセント地域のアクセントの現状について考えていきたい。

2. 調査方法

2.1 調査時期と調査対象

令和元年6月から9月にかけて、常陸大宮市民183名、比較対象として東京の大学生24名、合計207名を対象に調査を行った。東京の大学生のうち6名は地方の在住経験がない東京の生え抜きである。他18名に関しても無型アクセント地域に居住経験がないことを確認した。

年齢別による内訳は表1に記した。本稿では、10代～30代を若年層、40代～50代を中年層、60代以上の高年層にわけて考察をする。

表1 インフォーマントのうちわけ

| 年齢 | 全体 | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代以上 |
|--------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 常陸大宮市 | 183名 | 35名 | 31名 | 24名 | 34名 | 25名 | 21名 | 13名 |
| 東京の大学生 | 24名 | なし | 24名 | なし | なし | なし | なし | なし |

2.2 調査方法

調査対象207名に、アンケート（全3枚）に答えてもらった。

1枚目 インフォーマントの情報収集

簡単な質問に答えを記入してもらい、以下の項目を明らかにした。

年齢・性別・居住経歴・両親の出身地

自分がどの程度茨城の言葉で話しているかの自覚

メディア視聴時間

同音異義語をどう区別しているか

生育地に関しては、生まれてから10代をすぎた地域とし、全てのインフォーマントに対し直接確認を行った。

2枚目 知覚調査

アクセントの異なる同音異義語のある単語、例えば「飴だ」という音声を聞いてもらい、アクセントのみで意味を判断出来るかを明らかにする。表記をわかりやすくするため、東京アクセントで読み上げた語・文を選択した場合を「正解」とし、それ以外の回答を「不正解」、全16問のうち正解した割合を「正答率」とした。判定の音声はアナウンス経験のある筆者の録音音声を用いた。（問1）と（問2）にわけ、以下の回答をしてもらった。

（問1）「アメダ（LHH）」と聞いた場合、「雨」「飴」どちらに聞こえたか、そもそも普段から区別していないか、判断方法がわからなかったか選択し、○をつけてもらう。全部で8問。

【判定に用いた音声】

- ①アメダ LHH（飴だ）②ハシガ LHL（橋が）③ハナダ LHL（花だ）
 ④キル LH（着る）⑤ゲカイデス LHHHL（下界です）⑥ハシガ LHH（端が）
 ⑦エンギダ HLLL（演技だ）⑧ハガ LH（葉が）

【選択肢に用意した同音異義語】

- ①飴／雨 ②橋／箸 ③花／鼻 ④着る／切る
 ⑤下界／外科医 ⑥端／橋 ⑦演技／縁起 ⑧歯／葉

（問2）AとB、東京アクセントと東京アクセントでないもので発音された2通りの文が聞こえたとき、どちらに違和感がなかったか、または判断方法がわからなかったか選択し、○をつけてもらう。全部で8問。

※【 】で囲っている外は辞典と同一のアクセントで録音を行った。

後ろに○のついた選択肢が前述した「正解」

後ろに×のついた選択肢が前述した「不正解」と表記した。

- ① A 綺麗な【鼻がLHH】咲いた ×
B 綺麗な【花がLHL】咲いた ○
- ② A お店で商品を【買うLH】 ○
B お店で商品を【買うHL】 ×
- ③ A 火事で【日がLH】燃えています ×
B 火事で【火がHL】燃えています ○
- ④ A テストで成績を【漬けるLHH】 ×
B テストで成績を【つけるLHL】 ○
- ⑤ A 転んで膝から血が【出るHL】 ○
B 転んで膝から血が【出るLH】 ×
- ⑥ A 久慈川では【酒がLHH】卵を産む季節です ×
B 久慈川では【鮭がHLL】卵を産む季節です ○
- ⑦ A 肝臓に【異常がLHHH】見付き、再検査となった ○
B 肝臓に【以上がHLLL】見付き、再検査となった ×
- ⑧ A 秋になると森には【好みがLHHH】落ちています ×
B 秋になると森には【木の実がHLLL】落ちています ○

3 枚目 産出調査

インフォーマントに以下の文を読み上げてもらい、どんなアクセントで発音しているかを確認する。1名ずつ録音をし、録音した音声を音声分析ソフト praat でピッチを確認した。文節ごとにH（高）L（低）という記号でアクセントの産出を表した。文節に関しては一部傾向をみる目的で、文節に分けていない箇所・逆に細かく単語ごとにわけた箇所もあり、合計49文節を対象とする。

～読み上げる文～

血が出る／暑い夏に蝉が鳴く／咲いた花を見る／橋を渡る
蜘蛛が巣を作る／子が泣く／矢を射る／手を引く
看護師が雲を見ている／端を歩く／鳥が鳴く／箸を持つ
海を見る／雨が降る／泣く演技をする／花が咲いた
泣いている人を見る／賞味期限が切れた／厚い伝記を見る／酒を飲む

3. 調査結果

3.1 知覚調査の結果

まず、対象として調査した東京の大学生は、24名中20名が100%、3名が94%、1名が88%とほぼ正確にアクセントの弁別ができるという結果になった。それに対し、常陸大宮市の年代別平均正答率は表2の通りである。

表2 知覚調査の結果

| | 東京 | 全体 | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代以上 |
|------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 調査人数 | 24名 | 183名 | 35名 | 31名 | 24名 | 34名 | 25名 | 21名 | 13名 |
| 正答率 | 99% | 69% | 75% | 88% | 77% | 68% | 65% | 40% | 21% |
| 全問正解 | 20 | 17 | 2 | 7 | 4 | 3 | 1 | 0 | 0 |

常陸大宮市全体で正答率の平均は、69%。東京の大学生の正答率（平均99%）と比べるとアクセントを聞きとれていないことがわかる。更に全問正解したインフォーマントは183名中17名だけだった。正答率が高い順から20代、30代、10代、40代、50代、60代、70代以上という結果になり、10代～30代の若年層と40代～50代の中年層、60代～70代以上の高年層の順に下がっていくことがわかった。従来は同音異義語をアクセントで弁別できない地域であることがいえる。ただ、年齢が低いほど正答率が高いというわけではなく、10代の平均は20代の平均を下回っていることから年齢のみが共通語化の進行に影響を与えるわけではないことも考えられる。

3.2 産出調査の結果

産出に関しても、49文節のうち何%が『日本語発音アクセント辞典』に掲載されているアクセントと一致しているかを「辞典との一致率」として表した。比較対象である東京の大学生の結果は、24名中13名が100%、8名が98%、その他96%・94%・92%がそれぞれ1名ずつであり、平均は99%とほぼ正確に東京アクセントを産出していた。それに対し、表3が常陸大宮市の結果である。

表3 産出調査の結果

| | 東京 | 全体 | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代以上 |
|--------|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 調査人数 | 24名 | 183名 | 35名 | 31名 | 24名 | 34名 | 25名 | 21名 | 13名 |
| 辞典との一致 | 99% | 82% | 87% | 90% | 87% | 84% | 78% | 70% | 64% |
| 全文節一致 | 13 | 2 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |

常陸大宮市民183名中全ての文節が辞典と一致したインフォーマントは20代の2名だけであり、平均は83%。東京の大学生と比べると東京アクセントの産出が難しいことがわかる。産出に関しても、20代、10代30代（同率）、40代、50代、60代、70代以上の順に、高年層ほど辞典との一致率が下がっていくことから、知覚同様、従来東京アクセントでの産出が難しい地域であることがわかる。

単語ごとの辞典との一致率は49文節中46文節が70%を超えていることが確認され、基本的に東京アクセントに馴染みがあることがわかった。しかし単語ごとに注目すると、「伝記が」

に関し、東京アクセントではない HLLL での産出が78%を占め、「箸を」と「端を」に関しては、どちらも東京アクセントではない LHL が52%を占める結果となった。東京アクセントに馴染みがあるにしても、アクセントの多数派が東京アクセントではない単語もあることがわかる。

また、1つの調査語に対して実に多様なアクセントが見られた。例えば、「渡る」に関して、東京アクセントの LHH は49名で81%、他のアクセントは LHL 7名 HLL12名 HHL 7名 HLH 4名 LLH 2名 HHH 2名と7種類ものアクセントが確認できた。少数派のアクセントがその特定のインフォーマントに出るわけではなく、どのアクセントも2名以上使用者がいる。アクセントの多数基本的に東京アクセントであるものの、語ごとに確定的なアクセントを持たないことが明確になった。

3.3 調査の総合結果と考察の目的

知覚調査・産出調査ともに、東京の大学生と明確に差があることがわかった。知覚調査からは、茨城県常陸大宮市には無型アクセント地域の「アクセントの弁別機能がない」という特徴が明らかになり、産出調査からは、1つの語に対し実に多様なアクセントの産出が確認できたことで、「アクセントが語ごとに確定していない」という特徴があることが明らかになった。また、知覚調査の正答率（以下：知覚調査結果もしくは正答率など）・産出調査の辞典との一致率（以下：産出調査結果もしくは一致率など）が、どちらも高年層中年層若年層の順に高くなっていることから、共通語化が進んでいることも明らかになった。

本稿では、共通語化の進む今現在、これらの特徴が、どのような様相をみせるのか考察をしていく。

4. 考察 ～アクセントの弁別機能について～

4.1 判別しやすい同音異義語と判別しにくい同音異義語

この章では、「アクセントの弁別機能がない」という特徴について考察をする。弁別機能がないとはいえ、単語ごとに正答率に差が見られたことから、単語により判別の難易度が異なることがわかる。表4がその単語別表である。

表4 単語別知覚調査結果

| | | | | | | | | |
|--------|------|------|------|------|------|-----|------|------|
| (問1) | 鮎だ | 橋が | 花だ | 着る | 下界です | 端が | 演技が | 葉が |
| 常陸大宮市 | 55% | 76% | 61% | 69% | 77% | 50% | 83% | 52% |
| 東京の大学生 | 100% | 100% | 100% | 100% | 100% | 96% | 100% | 96% |
| (問2) | 花が | 買う | 火が | つける | 出る | 鮭が | 異常が | 木の実が |
| 常陸大宮市 | 63% | 84% | 75% | 73% | 80% | 70% | 84% | 58% |
| 東京の大学生 | 100% | 100% | 100% | 100% | 100% | 92% | 100% | 96% |

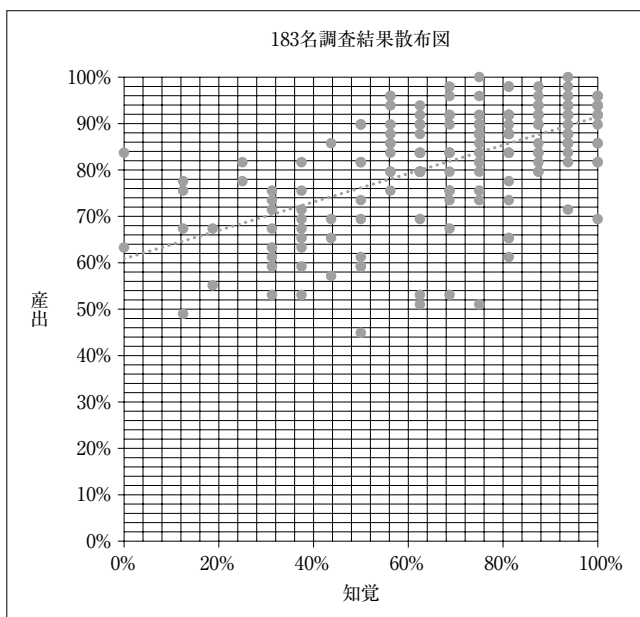
「端が」の正答率が最も低く、判別が難しいことがわかる。単語ごとに正答率が異なる以外にも、インフォーマントの共通語化の進捗によって判別の難易度が異なることもわかった。例えば、「鮎が」に関し、知覚調査でアクセントの弁別機能がないグループ（正答率20%～40%）と比較的弁別機能があると言えるグループ（正答率80%～90%）に分けたとき、前者の平均正答率は16%、後者は85%と差が大きかった。しかし、正答率が最も高い「異常が」に関し、同様のグループに分けたとき、弁別機能がないグループの平均正答率は84%、弁別機能を有するグループは99%と差が小さかった。つまり、「以上が」と「異常が」は共通語化が進んでいない群でも比較的容易に弁別ができる語であると考えられるだろう。

また、知覚と産出でアクセントの弁別機能に差はないのか、「アメ」「サケ」「ハナ」「エンギ」について、知覚調査・産出調査の両方で調査した。表5がその結果である。

表5 知覚と産出の弁別機能差

| 調査した同音異義語 | 知覚調査 | 産出調査 |
|-------------|------|------|
| アメ「飴」「雨」 | 55% | 63% |
| サケ「酒」「鮭」 | 70% | 74% |
| ハナ「花」「鼻」 | 63% | 81% |
| エンギ「演技」「縁起」 | 83% | 92% |

「エンギ」「ハナ」「サケ」「アメ」の順番に知覚・産出の結果が同じ順番で下がっていくこ



とから、この調査方法でも語ごとに弁別の難易度があることがわかった。更に、いずれの語にしても産出の値の方が高いため、知覚よりも産出の方が区別できているように見える。常陸大宮市のインフォーマント183名の産出調査の結果（縦軸）と知覚調査の結果（横軸）を散布図で表したときに、明らかに産出調査より知覚調査の分布が広いことから、知覚よりは産出の弁別の方が、ある程度共通語化が進んでいるといえるかもしれない。

4.2 「ハシ」の弁別について

ここまでで、同音異義語には無型アクセント地域のひとつでも判別しやすい・判別しにくいという差があることが明らかになった。その中でも判別が難しいと判明した「ハシ」を例に、アクセントの弁別機能の習得について考察を行う。

「橋」「端」「箸」は、「ハナ」「アメ」「サケ」「エンギ」に比べ、極端に弁別が難しいことがわかっている。表6にその「ハシ」の年代別産出結果を示した。語の一段下のアクセントがその語の東京アクセントである。年代別で参照すると、「ハシ」に関しては共通語化が進んでいる20代でも他の世代と同程度にしか弁別ができていない。そのため共通語化が進んでも弁別が難しい語であることがわかる。カウントしたところ、「ハシ」を3つ全て正確に産出できたのは183名中23名のみであった。

表6 「ハシ」の年代別産出結果

| | 全体 | | 10代 | | 20代 | | 30代 | | 40代 | | 50代 | | 60代 | | 70代 | |
|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 箸を | 183 | | 35 | | 31 | | 24 | | 34 | | 25 | | 21 | | 13 | |
| HLL | 66 | 36% | 13 | 37% | 12 | 39% | 6 | 25% | 14 | 41% | 9 | 36% | 7 | 33% | 5 | 38% |
| LHL | 96 | 52% | 16 | 46% | 16 | 52% | 18 | 75% | 18 | 53% | 11 | 44% | 11 | 52% | 6 | 46% |
| HLH | 2 | 1% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% | 1 | 4% | 1 | 5% | 0 | 0% |
| LHH | 19 | 10% | 6 | 17% | 3 | 10% | 0 | 0% | 2 | 6% | 4 | 16% | 2 | 10% | 2 | 15% |
| 端を | 183 | | 35 | | 31 | | 24 | | 34 | | 25 | | 21 | | 13 | |
| LHH | 76 | 42% | 13 | 37% | 21 | 68% | 8 | 33% | 10 | 29% | 11 | 44% | 8 | 38% | 5 | 38% |
| LHL | 95 | 52% | 21 | 60% | 9 | 29% | 15 | 63% | 22 | 65% | 13 | 52% | 10 | 48% | 5 | 38% |
| HHL | 1 | 1% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% | 1 | 3% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% |
| HLL | 10 | 5% | 1 | 3% | 1 | 3% | 1 | 4% | 1 | 3% | 1 | 4% | 3 | 14% | 2 | 15% |
| HHH | 1 | 1% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% | 1 | 8% |
| 橋を | 183 | | 35 | | 31 | | 24 | | 34 | | 25 | | 21 | | 13 | |
| LHL | 175 | 96% | 35 | 100% | 29 | 94% | 23 | 96% | 34 | 100% | 24 | 96% | 19 | 90% | 11 | 85% |
| LHH | 3 | 2% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% | 2 | 10% | 1 | 8% |
| LLH | 1 | 1% | 0 | 0% | 0 | 0% | 1 | 4% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% |
| HLL | 3 | 2% | 0 | 0% | 1 | 3% | 0 | 0% | 0 | 0% | 1 | 4% | 0 | 0% | 1 | 8% |
| HHH | 1 | 1% | 0 | 0% | 1 | 3% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% | 0 | 0% |

更に「端を」について、東京アクセント「端をLHH」で発音する割合が全体で42%であ

るのに対して、「橋がLHL」と同じアクセントで発音する割合は52%にのぼることがわかった。「箸がHLL」においても、東京アクセントで発音する割合が全体で36%なのに対して、こちらもまた「橋がLHL」と同じアクセントでの産出が52%と半分以上を占めていることがわかった。しかし、3つの「ハシが」を全てLHLで発音していた割合を調べると、183名中64名（全体の35%）だった。「ハシが」の弁別ができていないインフォーマントが183名中159名（全体の87%）であることを考えると、「ハシが」を全てLHLと発音しているひとは決して多くはない。無型アクセント地域に関する平山輝男氏の研究で「すべての語にアクセントの型のきまりがありません。そしてきわめて自由に（無法的に）発音されます。」（平山 1968）とあるように、「ハシが」を区別せずLHLで発音しているというよりは、この3つの「ハシ」に関してはきわめて自由に（無法的に）発音されるということである。ただ、常陸大宮市は河川・用水路の多い地域であり、当然「橋」も多く「橋」の単語親密度が「端」「箸」に比べて高いことが予想される。さらに「端」ではなく「はしっこ」「はしんどこ」と発話することが多いため、単語親密度の影響で「ハシ」を「橋がLHL」と産出する傾向は考えうる。

4.1にて、知覚よりも産出の方が弁別機能を有する可能性の考察を行ったが、「ハシ」を区別して産出できるインフォーマントは知覚の区別もできるのだろうか。「ハシ」を区別して産出できた23名について注目していく。まず、産出調査では23名全員が、49文節のうち9割程度を東京アクセントで発音できることがわかった。しかし、知覚においては、75歳44%・17歳56%が確認でき、他もばらつきがあった。

更に知覚調査で、

- ・音声「橋がLHL」を「箸がHLL」と「橋がLHL」に聞き分けられるか、
- ・音声「端がLHH」を「橋がLHL」と「端がLHH」に聞き分けられるか

を確認すると、この23名は産出の結果が全員90%以上にも拘わらず、知覚では「ハシ」を判別できないインフォーマントが8名もいることがわかった。無型アクセント地域において、知覚で「ハシ」を判別することは、東京アクセントの産出がある程度できて難しいということがわかった。そのため、「ハシ」を聞くだけで意味が判別できるという段階は、かなり東京アクセントを習得しているといえるだろう。今までの考察を共通語の進度の順にまとめると図1のようになった。

図1 アクセントの弁別機能に関する考察

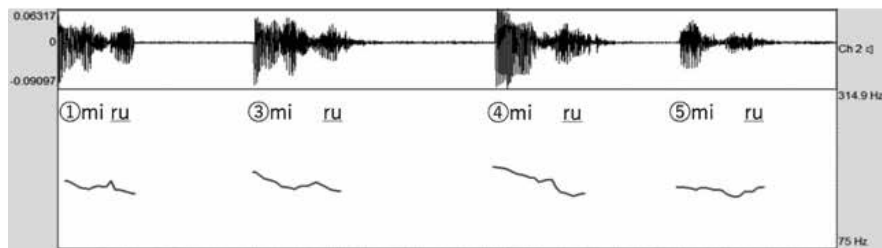


5. 考察 ～語ごとに確定的なアクセントを持たないことについて～

「北関東方言のそれは『茨城の尻上がり』あるいは『栃木の尻上がり』などと呼ばれて、東京を含む周辺の人々に知らぬひとはいない。」(山口 1975)と言われるほど茨城のアクセントは語の後ろが上昇するというイメージがある。先行研究や産出調査で、無型アクセント地域には語ごとに確定したアクセントを持たないことが明らかになったが、この章では、茨城県のアクセントが「茨城の尻上がり」であることを踏まえながら、確定的なアクセントがない茨城県常陸大宮市のアクセントはどのような特徴をもつのか、その特徴がいかに共通語化していくのか論じる。そのため本稿では、尻上がりである LH・LHH・LLH・HLH 等の語の後ろが上がるアクセントを上昇調、反対に HL・HHL・HLL・LHL 当の語後ろが下がるアクセントを下降調と呼び、区別することとする。

5.1 「見る」と「泣く」のアクセントのゆれ

無型アクセント地域の語ごとに確定的なアクセントを持たないという特徴について、同じひとが同じ語を何回か産出するとその度アクセントが変わる“アクセントのゆれ”が見られることが言われている。(佐藤 1984等) 今回の産出調査でも、アクセントのゆれが見られた。ここでは産出調査の文中に5回使用した「見る」について述べていく。下の画像は、常陸大宮市に在住する63歳女性の音声を音声分析ソフト praat で「見る」のピッチ曲線で表したものである。今回の調査では「見る」を終止形4回(①咲いた花を見る③海を見る④泣いているひとを見る⑤厚い伝記を見る)、連用形1回(②看護師が雲を見ている)発音してもらった。画像は終止形①③④⑤の「見る」のみ表示している。



④のみが東京アクセントの発音 HL であり、①③は「る」の方が高い LH、⑤に関しては高低差がないように聞こえる HH アクセント (ピッチ曲線では上昇が確認できる) になっていた。このように同一人物でも「見る」のアクセントがその都度異なることが確認できる。このアクセントのゆれを認めたインフォーマントの数は年代別に表7に示した。

表7 「見る」のアクセントのゆれの人数と割合

| | 全体 | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代以上 |
|---------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 調査人数 | 183 | 35 | 31 | 24 | 34 | 25 | 21 | 13 |
| 「見る」のゆれがあった人数 | 65 | 10 | 6 | 6 | 10 | 11 | 12 | 10 |
| 「見る」のゆれの割合 | 36% | 29% | 19% | 25% | 29% | 44% | 57% | 77% |

高年層ほどアクセントにゆれがあることがわかり、この特徴も従来の茨城県常陸大宮市のものであると考えられる。アクセントのゆれがあるという点でも、アクセントが語ごとに確定していないことがわかった。

「見る」を5回発音してアクセントが一致しなかった割合は36%と全体の4割にのぼる。「見るHL」（第2類）が「見るLH」で産出されたということは、東京アクセントでは語の後ろが下がる下降調の語が、上昇調になったということである。「茨城の尻上がり」と呼ばれるように、茨城県のアクセントとは基本的に東京アクセントが上昇調になったものなのだろうか。もともと上昇調である「泣くLH」（第1類）のアクセントのゆれについても確認した。

産出調査では「泣く（鳴く：アクセント同一のため本稿では同じ扱いをする）」を3回発音（調査文章①子が泣く②鳥が鳴く③泣いているひとを見る）してもらった。表8がその結果である。表8では、3回発音をした「泣く」と同じ条件で比較をするため、「見る」の対象語を3つに減らし併記した。

表8 「見る」「泣く」のアクセントのゆれの人数と割合

| | 全体 | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代以上 |
|----------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 調査人数 | 183 | 35 | 31 | 24 | 34 | 25 | 21 | 13 |
| 「見る」を3回にした後の人数 | 37 | 5 | 4 | 2 | 5 | 8 | 8 | 5 |
| 「見る」を3回にした後の割合 | 20% | 14% | 13% | 8% | 15% | 32% | 38% | 38% |
| 「泣く」のゆれがあった人数 | 40 | 2 | 1 | 2 | 8 | 8 | 12 | 7 |
| 「泣く」のゆれの割合 | 22% | 6% | 3% | 8% | 24% | 32% | 57% | 54% |

「見る」を3回にした状態の数字で「泣く」の結果と比べると、茨城県常陸大宮市全体で「見る」のゆれが20%、「泣く」のゆれが22%と差がないように思われる。しかし、「見る」のゆれが10代～40代で10%程度（共通語化が進んでいるはずの20代とそこまで進んでいない40代で差がそれほどない）、50代～70代以上で35%程度であるのに対し、「泣く」のゆれの割合は

20代3% < 10代6% < 30代8% < 40代24% < 50代32% < 70代以上54% < 60代57%

であり、共通語化が進んでいる世代とそうでない世代で割合に差がでることがわかった。これは、「見るHL」が「見るLH」つまり下降調のアクセントが上昇調にゆれることと「泣く

LH]が「泣く HL」つまり上昇調のアクセントが下降調にゆれることの差と関係があるのだろうか。2拍動詞だけではなく3拍動詞・2拍名詞も確認した。

3拍動詞について、東京アクセントが上昇調である「渡る」を下降調で産出している割合、東京アクセントが下降調である「作る」「歩く」を上昇調で産出している割合を世代別に表に整理した。同じように3拍名詞にでも、東京アクセントが上昇調である「鳥が」を下降調で産出している割合、東京アクセントが下降調である「夏に」「花が」を上昇調で産出している割合を世代別に表に整理した。

表9 3拍動詞・3拍名詞の下降調・上昇調への変化割合

| | 全体 | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代以上 |
|-------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 「渡る」を下降調で産出 | 10% | 3% | 0% | 4% | 6% | 12% | 43% | 54% |
| 「作る」を上昇調で産出 | 9% | 3% | 6% | 8% | 15% | 16% | 10% | 8% |
| 「歩く」を上昇調で産出 | 10% | 11% | 3% | 8% | 9% | 4% | 15% | 30% |

| | 全体 | 10代 | 20代 | 30代 | 40代 | 50代 | 60代 | 70代以上 |
|-------------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-------|
| 「鳥が」を下降調で産出 | 16% | 3% | 0% | 0% | 18% | 16% | 43% | 62% |
| 「夏に」を上昇調で産出 | 11% | 20% | 13% | 16% | 3% | 8% | 5% | 15% |
| 「花が」を上昇調で産出 | 15% | 20% | 10% | 12% | 15% | 20% | 10% | 8% |

やはり、共通語化が進む若年層の方が、上昇調の語に対して下降調のアクセントを用いない傾向が明らかになった。LHLで発音する動詞・名詞ともに年代ごとの差が出づらく、「夏に」に関してはむしろ若年層の方が、中年層・高年層に比べて上昇調のアクセントを使用する割合が高い現象が起っていた。

5.2 アクセントに上昇がみられるか下降がみられるか

ここまでの分析で、東京アクセント以外のアクセントが産出されたときにおいて、東京アクセントで上昇調の語が下降調になるか、下降調の語が上昇調になるかという問題は、年齢が上がるほど本来上昇調の語を下降調で発音してしまうひとの割合が増えるということが明らかになった。しかし、そこから従来の茨城県常陸大宮市のアクセントが「下降調のアクセントが産出される傾向にある」と主張するには「茨城の尻上がり」という言葉があることや、上昇調の発音をしている高年層と若年層の割合に近いことから一度再検討する必要がある。そのためここでは、今まで割合としてしか見てこなかった常陸大宮市民183名の個人の産出結果の特徴に焦点をあて、茨城県常陸大宮市の従来の特徴とはなにか考察していく。

まず10代に焦点をあてる。「咲いた LHH」を「咲いた HLL」と発音した18歳女性は、茨城県常陸大宮市の生え抜きである。知覚調査は正答率が69%、産出の辞典との一致率は76%で10代の平均（知覚：75% 産出：87%）よりもいくらか低い。全ての語を下降調で産出し

ている訳ではなくむしろ「夏に LHL」「看護師が LHLL」「箸を LHL」「見る HL」「降る HL」の5つの文節が平板化しており、上昇調で発音することの方が多かった。

逆に東京アクセント以外の産出をしたとき、全てのアクセントが上昇調になった17歳男性（茨城県常陸大宮市生え抜き）は、「作る LHL」「箸を LHL」「見る HL」「切れた HLL」の4つの文節が平板化したが、東京アクセントが上昇調である語を下降調に産出した文節は見られなかった。知覚調査は正答率が69%、産出の辞典との一致率は84%で、産出は10代の平均（知覚：75% 産出：87%）だが知覚がいくらか低いインフォーマントである。

また、考察している現象がどちらもあまり起こらなかった17歳女性は、知覚結果94%産出結果92%とどちらも高い水準であった。産出調査でのミスは「橋」「端」「箸」を全て「ハシが LHL」と発音してしまったことと、「厚い LHH」を「暑い LHL」と区別せずに発音したことである。難易度の高い同音異義語が産出で区別できていないということだった。

これを元に他の10代の産出を確認すると、上昇調アクセントである語を下降調で発音していたインフォーマント（35名中9名）は同時に下降調の語を上昇調で産出してしまう現象が多く起こっていた。

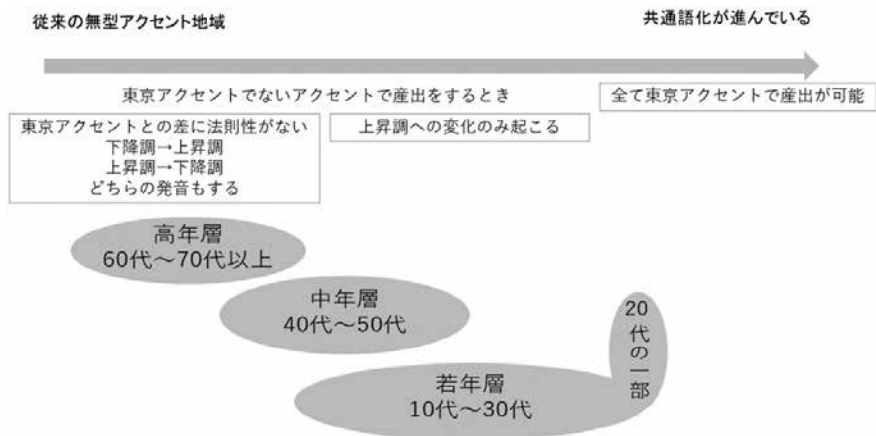
他全ての世代も割合の程度以外は同様の結果になった。例えば30代、下降調になる現象が確認できたのが21名中5名で、そのうち全員が30代の産出の平均87%に届かず、30代のなかで知覚・産出両調査のスコアが最も低い39歳男性も当てはまった。通語化が最も進んでいる20代も下降調になる現象が確認できたのが31名中5名（割合的には全体で最も少ない）で、他の世代同様、東京アクセント以外で産出するとき全員が、下降調だけでなく上昇調のアクセントも用いていた。

また、高年層で注目すべきは、60代は21名中21名、70代以上は13名中13名、つまり全員東京アクセントで上昇調の語を下降調のアクセントで産出する文節があったことだ。更に、高年層でも他の世代と同じように、下降調への変化だけでなく上昇調への変化も全員に起こっていた。

183名全ての産出に同様の確認を行ったが、上昇調アクセントである語を下降調アクセントで発音をしていたひとで、下降調の語を上昇調に産出しないインフォーマントは確認できなかった。また、70代以上の13名全員に下降調への変化・上昇調への変化どちらの現象の方が多いかカウントしたところ、前者が3文節、後者が8文節のインフォーマントもいれば、それぞれ12文節・2文節のインフォーマントもおり法則性がつかめなかった。4.2で「ハシ」の弁別について「すべての語にアクセントの型のきまりがありません。そしてきわめて自由に（無法的に）発音されます。」（平山 1968）という引用をしたが、こちらに関しても従来の無型アクセント地域の特徴が強いほど、東京アクセントでないアクセントの産出は極めて自由に無法的に発音されていることが明らかになった。つまり、従来の茨城県常陸大宮市のアクセントが「下降調のアクセントが産出される傾向にある」訳ではなく、従来の茨城県常陸大宮市のアクセントに近いほど、下降調のアクセントも上昇調のアクセントも無法的に用い、共通語化が進むほど上昇調のアクセントへの変化のみ起こることが言えるのでは

ないか。まとめると、共通語化について図2のように考えた。

図2 語のアクセントが確定していないことへの考察



おわりに

共通語化が進行する無型アクセント地域、茨城県常陸大宮市を調査することで、無型アクセント地域の特徴である①弁別機能がないこと②語・文節ごとにアクセントが確定的ではないことの現状を確認し、①②の特徴がない共通語へとどう変化していくのかその過程を論じるのが本稿の目的であった。目的通り、共通語化の進度ごとにアクセントの弁別がしやすい語や、アクセントの産出の傾向を明らかにすることができた。

調査をしていく中で、高いレベルで東京アクセントと同じ産出ができて、そのアクセントの高低幅が東京生え抜きのインフォーマントより狭く、音の高低差が少ないインフォーマントが多数見られた。そのため、産出調査で録音した音声を聞いただけでも明らかに東京のひとの産出ではないとわかる。知覚調査でも特に迷いなく判断をしていく東京の大学生とは違い、考えながら判断しているひとがほとんどだった。そのため、完全に東京のひと並に知覚も産出もできているインフォーマントというのは今回の調査ではみられなかったといえる。これは先行研究でも同じ結果がみられ、1979年に無型アクセント地域(栃木県宇都宮市)の調査を行った佐藤亮一氏によると、宇都宮市でもアクセントの共通語化が起こっていたものの「無型アクセント地域で育ったひとで完全に共通語化しているひとはいない」(佐藤1984)という結果になった。1975年と本調査の2019年では44年経っているが、未だに無型アクセント地域の完全な共通語化には至っていないといえよう。

東京アクセントに日常的に触れる環境が共通語化を進めるのであれば、若年層の無型アクセント地域の共通語化が進む現状をみるに、共通語化は更に進行していくと思われる。進行したその先に、現在無型アクセント地域である茨城県常陸大宮市でも、完全に産出も知覚も

東京の生育者と同等にできるひとが現れるのであろうか、従来の無型アクセント地域の特徴をもつひとは残るのだろうか、これからの茨城県常陸大宮市のアクセントがどのような様相をみせるのか、今後の課題である。

注

- (1) 金田一春彦『新明解日本語アクセント辞典 第2版 CD付き』三省堂2007

【参考文献】

- 金田一春彦『新明解日本語アクセント辞典 第2版 CD付き』三省堂2007
坂本清恵、秋永一枝『樺垣京都アクセント基本語資料：東京弁アクセント付き。「早稲田語類」「金田一語類」対照資料』アクセント史資料研究会1998
NHK放送文化研究所『日本語発音アクセント辞典』NHK出版2016
平山輝男『全国アクセント辞典』東京堂出版1960
平山輝男『日本の方言』講談社1968
金田一春彦（1948）「一型アクセントについての考察—水戸方言のアクセントについて—」『コトバ』7号
山田伸子（2007）「日本語学習者および茨城方言話者による東京方言アクセントの習得：その類似点と相違点について」『音声研究』第11巻、第3号、p23～37
早野慎吾（2006）「無型アクセントの比較研究—栃木・茨城アクセントと宮崎アクセントの比較—」『地域文化研究』Vol.1、p23-32
佐藤亮一（1984）「無型アクセント地域におけるアクセントの共通語化」『現代方言学の課題 記述的研究編』2、p221-234
山口幸洋（1975）「一型アクセントをめぐる諸問題について」『国語学』102、p50-62